

離開の日が来るのは、着いた時からわかっていた。もうすぐ夏休みを終えて帰ってくる学生たちに、制作場所をゆずらなくてはいけないので、潮時としてはちょうどいい。それでも、しばらく住んだ場所を離れるのはつらい。歴史があって美しいChesterの街は、今では自分の英国での故郷だと思えるほど愛している。お馴染みになった人々とも別れなくてはならない。そして、わたしの親愛なるパートナーMaxineさんとも、来年まで会えない。

わたしは滞在を仕事の都合で2回に分けた。2回目になる今回の滞在の主な目的は、作品を制作することだったけれど、できるだけ多くの人にきものを着てもらおうという密かな目的も胸に秘めて渡英した。中国留学中にいろいろな人にゆかた（綿のきもの）を着せまくって楽しんでもらい、その面白さに味をしめて以来、これは日本の文化を紹介するためにわたしがとれる最善のパフォーマンスだと思っている。きものが日本の伝統文化、そして今日の文化とも深く関連していることを体験を通して知ってもらって、さらに袖のたもとや帯の間、胸元といった、物をしまっておくためのポケットのような空間を示そうと思っていた。幸いにして、きものは着る人のサイズを限定しない。だから、ひとつのきものを共用することができた。8月中は学校には人がおらず、きもの出番も少なかったが、9月に入って教職員が夏休みから帰ってきてからは何度も何度も活躍した。今回の滞在では合計8人にきものを着てもらい、スケジュールが許す範囲で、着たまましばらく時間を過ごしてもらった。普段の歩き方だと、太もものあたりが窮屈だったり、すそがおおきく翻ることから、きものから受ける行動の制限に驚いている人が少なくなかった。何枚も重ねて着ることや、胴を2周する帯の長さ、素材の質に驚いている人もいた。みんな楽しんで着てくれて、それぞれにとってもよく似合っていた。MaxineさんとはChesterにある競馬場にきもので一緒に出かけた。その後にウィンドウショッピングしたりパブに行ったりして、10時間くらいきもので過ごした。いつもと違ってまわりの人々が驚いたり、賞賛の言葉をかけてくれたりするのを、わたしたちも楽しんだ。

はじめて扱うとてもデリケートな素材に気をつかいながらだったので、作品の制作は遅々として進まず、結局9月に入ってから夜や土日もスタジオにこもって作業をした。夏休み中に制作を終えようというわたしの野望はもろくも崩れ去り、続きは日本で教える仕事の合間を縫って進めることとなった。

Maxineさんとの対話の中から、次につくりたい作品のアイデアを捕まえることができた。しばらくこのジーンズポケットシリーズを連作してみようとおもっている。

久しぶりに指導される側に立ち、Maxineさんの導く方向に進んできた。とても光にあふれていて、見通しのいい道だった。わたしも、求める人にはより明るい道を指し示す力を身につけたい、との思いを新たにしました。

わたしのChester滞在におけるスポンサーになってくださったChester College of Higher Educationの関係者のみなさま、

どうもお世話になりました。心から感謝します。

わたしの素晴らしいMentor Artist,Maxineさん、

どうもありがとうございました！お互いに作品制作がんばりましょう！

新田恭子

